

宗教の本質に就ての一考察

望 月 舜 勝

抑々宗教とは何うして起つて來るか、何處から起つて來たものであるか、實に宗教は人間性の本然の要求に基くもの、人間の心から湧出づる所のものである。凡そ人間は皆衝動性本能性を持つてゐる。渴すれば飲まんとし、飢えれば食はんと欲するは人間の自然の衝動である。これは人間の生存に必要な所から本能となつて現れてゐる。これがなければ生存することが出来ない。このうちに快樂を求め苦痛を避けるといふ本能もある。吾々人間は總て快樂は之を欲し、苦痛を必ず避けんとする。これは自然の情である。宗教も亦その根底とするところはこの快樂を求め、苦痛を避けるといふことにあつてゐる。これは單に宗教のみではない。すべて吾々の文化生活と稱するもの、學問の研究にせよ藝術の觀照にせよ皆快樂を求め苦痛を避けるといふことに根ざして居る。宗教も亦これと同じく人間のこの性情から起つて居るのである。古の聖人が人間の道徳心を養成する爲に造り出したものといふ様な人爲的のものではない。人間の心からして自然に現れて來るところのものである。而して宗教的要求は全

生命の要求である。學的要求、藝術的要求、道德的要求は部分的要求である。學問研究は吾々の知的活動である。知識の統一調和を求めんとするのみ。宗教はこれより範圍が廣い。知識と感情と意志と何れの部分に於ても總ての調和が得られなければ眞の安心は得られない。即ち信することは出来ない。知的の經驗の範圍内に於て何等か衝突し撞着したるものが現はれる。こゝに知識的疑問が起るのであるが、この時吾々はその疑問をそのままに甘受してゐる譯にはゆかぬ。これを解決しようとする。疑問とは不統一の状態で苦痛である。若し之を解決し得るならば初めて統一を得る。そこで初めて愉快になる。疑問が大なれば大なる程、それが解決された場合には非常な愉快と感ずる。それが解決せられない間は苦痛である。宗教亦然り。例へば智と情と或は情と意志との間に衝突がある。自分は斯うありたいと思ふけれども意志が弱くてその通り出来ない。誠に自分は不甲斐ない者である。内に省みて衝突を感ずる。この時宗教心は現はれて来る。古聖の宗教に入つた動機を考へて見ると、或は家庭が不和であるとか、或は社會と自分が衝突をしたとか、或は自分の意志が大變に弱いといふことを感じたとか、或は自分の非常に無能を感じたとか、自ら省みて何か自己のうち不完全な点撞着したる点を認め、初めて宗教心が起つて來てゐる。その撞着が認められない場合には宗教心は起つて來ない。恰も子供が体の健康な時には苦痛を訴へないが、何か胃腸を害したとか何か具合が悪いと苦痛を訴へると

同じである。吾々は平常の状態に於ては宗教心は起らない。宗教心がないのではないけれど宗教心が現はれて來ない。何かの機會に出會して初めて自分の内省に依り、そこに宗教心が起つて來る。故に宗教心の起る第一要素としては先づ自分自身の不完全であることを自覺せなければならぬ。その自覺することが痛切であればある程宗教を求むる心が痛切に起つて來る。自覺がなければ宗教心を起さうといふ機會が與へられない。その機會を與へるのは自覺に在る。然らば自覺はどうして起るか。それは何かの場合に於て反省することに依つて起る。故に人間はその機會が與へられないと仲々反省をしない。自ら反省して自分の不完全であることを感ずれば感ずる程、そこで苦痛が大となる、所謂煩悶に入る。その苦痛が大きくなるから苦痛を何うかして取去らうと努める。かく宗教に入るには自覺が最も肝要である。自分自身の心の状態をよくよく自覺することが第一要素である。次にその反對の方面から見ると第二要素として、時を異にし處を異にし何か一定の現在よりも完全な状態があるといふことを知つて、而してそれを何等かの方法によつてそこまで到ることが出来るか。そういう希望が少くともなくてはならない。吾々は如何に苦痛を感じても、又如何に不完全なものであると自覺しても、他にそれより良い場所、それよりも幸福な境地、完全な世界がないとすればそこへ行かうとする努力は起らない。又他に完全なる場處があつても、そこへ何等かの手段によつて到達することが出来ること

いふ少くとも望みがなくては吾々にその努力を生ぜない。如何に現在が苦痛であつてもこれより以上の良い處はないといふことを考へたならばじつとしてそれを堪え忍ぶより外はない。それより此方がいふといふことを考へ、その方へ或る一定の手段に依りそこに到達することが出来ることが解つて、初めてそれへ行かうといふ緊張が起る。即ち努力が生ずるのである。こゝまでは人間生活形式の凡ての方面に共通であるといふてよい。そこで宗教に於ては如何なる手段によつてその目的に到達するかといふと、所謂人間的なる神とか佛によつてその目的を達せんとするのである。これ即ち宗教である。畢竟宗教心とは吾々の不完全なることを認め、而うしてより完全な境地に就かんとして努力する所の状態であると云つて差支ない。何か恐しいものがある。苦痛を與へるものがある。それを無くせようとして神や佛に縋つてその御守護を受ける。或はそれが恵みを與へられる。といふ風に考へる。そこで初めて宗教が起る。宗教の理想として解脱の境とか、成佛とか、佛土とか、往生とか、極樂淨土とか種々様々に言つてゐるが、それ等は皆快樂の至つた状態、苦痛のなくなつた状態、それが即ち宗教の理想郷である。とに角あらゆる宗教の目的としてゐるところはこの不完全なる現實、不完全なる人間の境界を去つてより完全な境界に至らんと努力する。それが宗教的努力であつて又宗教的生活である。故に宗教の本体、本質は超人間的起自然的な神佛と人間といふ不完全なるものとの交渉

である。その關係である。之を感應、交通であるとか攝取救濟であるとか云つてゐる。即ち神と人、佛と人、超人間と人間。一方は完全無缺なもの、一方は不完全極なもの、その不完全なものを完全なものにしようといふのが宗教の本質である。これは如何なる宗教にも共通してゐる所の性質であつて非人格的宗教人格的宗教乃至は自然崇拜といふ様な極めて幼稚なものに於ても同じくその崇拜によつて自分の現在の状態の不完全苦痛を無くせよう、それを打越してそれよりも一層良い所に就かうといふことが動機となつて居らぬものはない。根本的に苦痛を解き除かうとする所まで行かなくとも少くとも一時的の或る苦痛災害をその祈願によつて無くしやうと考へる。即ち人間の不完全苦痛を去つて完全無缺な状態に行かうといふのが即ち宗教本來の目的であると云つて差支ない。

かく宗教の本質は神佛に依つて自己の不完全な状態を去つて完全なる状態に歸せんとする精神的努力である。而してその不完全なる状態とはたゞ吾々の知識とか感情とか、意志であるとかいふ心の一部分についての不完全な状態にあらずして心全体の不完全状態を去り心全体の平和即ち完全なる調和の状態に歸せんとするのである。所謂小我を去つて大我に没入するともいふ。小我とは吾々個人個人の我である。この個人我は上下貴賤老若男女を問はず生誕から死に至るまで或は愛憎の念に依り、或は嫉妬の念により、或は名利の念によつて熾烈なる活動を營んでゐる。即ちこの小我は不完全なもの、

如何にも清淨でない不淨なもの美なるものでなく醜なるもの道德的なものでなく不道德的なものである。吾々が日々の行爲について考へて見ても眞に心から満足する様な行爲は實に僅少である。缺点の多い恥かしい不完全だと思ふ心の状態が多い。智識に於いても極めて不完全なものもあるこの小我を棄て、大我に没入せんとする。大我といへば何か一種特別な大きなものがある様に考へられるけれどもこれは宇宙自然の法則、眞善義を完備した状態を暫く大我と稱する。何故これを我といふかといへば、吾々の小さな我に對して暫く大我と名づく。この小我とは智情意の働きを持つけれどもこの個人我に於てはそれが制限されてゐる極めて不完全なものである。それを完全なものにすると我の大なるものとなる。我の大なるものは眞善美を完備したものでなければならぬ。知識に於いても行爲に於いても意志に於いても無限大となる。則ち我が心を擴張して行く、これを大我といふ。個人は小宇宙でありこの大宇宙は大我であるをも考へられる。この大我のかはりに完全なる状態を色々な言葉をもつて言表してゐる。絶對的價值といふ様な語を使ふ。語は種々違ふけれども皆同一状態を指す。絶對價値は相對價値に對す。吾々はすべて相對的價值のみ持ち得ない。善行をなしたと云つてもそれは極めて範圍の狭い小善行に過ぎない。無限大の善とは到底個人の業ではない。吾々人間は知識を持つと云つてもその知識は極めて限られた範圍に止まるもので無限の事については難解難入である。個人我は

かく相對な價值しか持たぬもの、その無限に大きくなつた所のものが絶對價值である。吾々の知情意に於て眞善美の圓滿是足したものが絶對價值である。彼に對して此はいゝとか悪いとか彼より是は美であるとか醜であるとかいふものではない。眞善美の至れるものが絶對價值である。これが大我である。小我即ち相對我に對する絶對我である。カントの語を以て云へば純粹理性である。純粹理性とは吾々に自然に與へられて居る所のものであつて、この理性が知識方面に現はれて眞、藝術に現れて美、道德に現はれて善となるのである。併し吾々小我の行ふ善、或はそれが表し出す美、或はそれが研究して知るところの眞、それは皆純粹なものではない。それ等は皆吾々の欲望によつて制限されて現れて來る不純粹なものである。けれども吾々はその純粹なる眞善美の完備せるものを憧憬してやまない。相對的の我、歴史的の我、小我を棄て、純粹の大我に没入せんことを求めてやまない。支那宋時代の儒者が氣質の性本然の性といふことを云つてゐるがこの氣質の性とは小我である。即ち種々な欲望に制せられて現れて來る人間の心で不完全なものである。本然の性は本來然る所のもの、本より存する所のもの即ち絶對價值或は純粹理性である。たゞ人間の行に於てはそれが不完全に現れて來ると、氣質の性に打勝つて本然に歸るといふてゐる。畢竟言葉は種々に言表されてゐるけれども、その實に於ては殆んど同一であると云つて差支ない。之を宗教の言葉では神或は佛といふ。神と云つても

必ずしも直に基督教の神のみを意味するのではない。即ち絶対價值、吾々の眞善美の具足圓滿した状態を宗教の上で神といひ佛と稱するのである。既成宗教は種々様々であるが皆これを一面づゝ表してゐる。人間の文化の十分開けない時にはその絶対價值或は純粹理性を全体にそこに表し出すといふことは出来ない。故にその一面を見てこれを言表すに止まる。極めて單純な宗教である自然崇拜といふ様なものでも何か宇宙靈妙の働きを崇拜する。その働きとは何であるかといへば即ち絶対價值あるものであるが、唯それが極めて不完全に現れて來て居るだけである。漸次高尚なる宗教になるに従つてそれが完全に言表はざる様になる。畢竟するところ同じものであるけれどもその言表し方によつて又文化の程度によつて異つて來るのである。而してこの絶対價值或は純粹理性に歸つたもの即ち小我を没して大我に歸入したものの、これが理想的境界を得たるもので、これ即ち人間が神となり佛となつた所のものである。これを體驗したものと云ふ。體驗とは自己の體にそれを實現するの謂である。それを認めてそのまゝに自分に實現したものである。小我が没して絶対價值そのものが現れて來るのである。吾々の肉体がその爲に變化を受けるといふのではない。體はもとのまゝであるが併しその小我がすでに大我と合一して一体になるのであるから大我は小我を通じてその働きを現ずるといふことになつて來る。それが即ち體驗でしたるものである。轉迷開悟、轉凡成聖とは這般の消息を言表すもの

である。故に體驗した所のものは自然にして行ふものであつて佛教の語に「任運にして衣裳を換へる」といふ語がある。自然にして衣を更へて行くとは、暑ければ薄い着物を着る、寒ければ厚い着物を着る。自然にして各その適する所の物に變つて行くといふのが任運換衣裳である。或は又「應に住する所無くして而も住すべし。」住する所なしとは何處にもこれといふ定つて住する所はない、然も住する。普通の論理では住する所なければ住する所なく、住すれば住する所なしとは矛盾であるから言はれぬ筈であるが、これは超論理的であるが、これ等の語は自由自在の働きを言表はしたものである、住する所なしとは必ずこれでなければならぬといふことはないが自然にしてその宜しきに適つて行く、爲すべき時には爲す、爲すべからざる時にはせぬ。一定の主義とか方針とかいふことを固持して居るのではない。可笑しくても笑つてはならない。腹立つても恕つてはならない。さう云ふ窮窟な法則ではない。何處でも定住する所なくして而も住するとは到る處各宜しきに從つてやつて行くのである。この間の消息は古來からの聖賢の教と自ら一致する。孔子は心の欲する所に從つて矩を踰えずと云つてゐる。心の欲する所に從つて自然に法則に一致して來るといふ、何でもしたいまゝの事をしてそれが自ら法則に適つて行く、これが即ち無所住而住、任運換衣裳である。吾々凡人が心の欲する如く行つたならばどんな事を仕出來すか解らない。一々皆法に反いた事をするかも知れない。法の

爲に束縛されて居て漸くにして餘り惡事もしないでゐる。孔子は道徳修養の結果道徳法を體驗して道徳法そのものを具体化した人間である。故に如何なる事を行つても悉くそれが自然にして法に適つて行くのである。これが即ち道徳の極地であつて最早これは宗教の理想境に入つたものである。こゝまで行かなければ眞の體驗とは云はれない。聖人とはこの境地に到達したものである。老子は「無爲にして爲さざるなし」といふ。爲すことなくして爲さざる所無し。又これを反對に云つて「爲して爲さざる所無し」ともいふ。皆同じ教理である。爲して爲さざること無しといふも矛盾である。けれども爲して爲さざること無しといふのも、自然にして凡ての事を爲すといふのであつて所謂自然に法に反かざるをいふ。無爲にして爲さざるなしとは私意をもつて斯うしやうあゝしやうといふ計らひといふものがないといふことであつて、寒ければ寒い様な暑ければ暑いやうに適する着物を著ける。それが自然である。夏が來たから寒くても夏衣裳に更へなければならぬ。十二月からは冬だから厚い衣裳に更へなければならぬといふのではない。自然にしてその法に適つて行く様に任運に衣裳を換える。無爲にして爲さざるなし、何もせないけれども併し凡ての事が出來て行くといふ。そこには私心より發する所の働きはない。従つて判斷は正しく、爲すべきことは爲し、爲すべからざることは爲さぬ。この境地を佛教ではよく鏡をもつて喩へてゐる。美麗なものは美麗の通りに現れて居り、穢いものがうつ

れば穢いまゝに現れて居る。而して少しもその影を止むことをしない。然るに我々の心はさうは行かない。いゝものが來ればそれが過ぎ去つても欲しい、それを取りたいといふ風に欲望を恣にしてこれを追ひ求めてゐる。従つて善いものを悪い様に、悪いものを善い様に誤つて判断し易い。そのものある通り明瞭に判断が出來なくなつて仕舞つて常に自己に都合のいゝやうに解釋する。悪い事をして善いと思ふ。兎角自己中心に考へ、結局自己に不利益を來す様になるとも知らず識らずのうちに判断を誤る。故意でなくても無意識のうちに正義でなくなる。併し大我の境地に達すればそんなことはない。これが即ち絶對價値に入つたもの、絶對價値を體驗したものである。故にこれが凡ての文化の本となる。すべての文化が悉く之を土臺とし、これを本源とし、それから發し來る所のものである。要するに宗教とは神と人との關係に歸する。即ち人間が神と合一する。神人合一である神と人が融合一体となるのが宗教の本質であり、目的であり、理想である。

〔八、十一、十八稿〕